鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 22 年 2 月 5 日）

八佾第三

23　子 魯の大師に楽を語げて曰く、楽は其れ知るべきなり。始め作すときは翕如たり。之を従つときは純如たり、皦如たり。繹如たり、以て成ると。

大師というのは、音楽を司る役所の長官で、本来であればプロフェッショナルなのですが、その大師ですら音楽の構成について詳しく知らないようなので、孔子が暗黙裡に教えて差し上げましょう・・・というような場面です。

私は音楽の仕組みはだいたい分かる。最初は鐘が高らかに鳴り響く。次いで、すべての楽器が緩やかに思うままの音色を出して、尚且つ調和している。更に、はっきりと高い音で鳴り響き、最後には余韻嫋々（じょうじょう）として完結する。

音楽を楽しむ為にはその構成をよく知らねばならないけれども、その順番どおりにきちんといっているかどうかはプロでさえはっきりと分からない。特に孔子の時代になると音楽が廃れてきていましたから、孔子は音楽を復活させようという努力もしていたのだと理解します。

プロフェショナルがプロフェショナルとしての用を成さないという部分で、今の時代で考えましょう。

民主党が政治家主導と言って、官僚を一切表に出さない。特に、法制局の長官も答弁させません。自分たちよりもはるかにプロだと思う人に喋らせないというのは、日本をどんどん悪化させていく道を転がり落ちているような氣がします。

孔子はここで一所懸命音楽が廃れていくのを止めようとしているわけですが、今の時代そういう人が出てこないものかと感じました。

24　儀の封人 見えんことを請いて曰く、君子の斯に至るや、吾未だ嘗て見ゆることを得ずんばあらずと。従者 之を見えしむ。出でて曰く、二三子、何ぞ喪えることを患えんや。天下の道無きや久し。天 将に夫子を以て木鐸と為さんとすと。

衛の国に儀という町がありまして、封人とは国境を司る役人です。どうも隠者のようですが、その人が孔子が来たということで是非面会をしたいと、孔子の弟子に頼みました。

「立派な方が自分の前を通過する時には必ず、お目にかかるようお願いをしています。（今までお目にかからなかったことはありません）」

孔子の弟子が面会をさせました。面会が終って儀の封人が出て来て言いました。

「お弟子さん達よ、あなた方は何も心配することはない。天下に道義がなくなって久しいけれども、あなた方のお師匠さんは、必ず天が先覚者と為すべくそれなりのポストを与えるのだから、安心して先生の後を付いていきなさい」

この文章を読んで、木鐸の名前に値するようなものが欲しいと感じました。

前回「カレント」という雑誌をお配りしました。「カレント」は木鐸ということを意識して作られているもので、衆参両院議員全員に配布されています。ですから相当政治家には影響があると聞いています。私は頼まれて先月から原稿を書いていますが、せっかく政治家に影響があるのだから多少なりとも耳の痛いことを書こうと思って、先月は「鉄面皮の議員」という内容を書きました。今月もそれと同じようなことを書かせて戴きました。

25　子　韶を謂う。美を尽せり、又善を尽せりと。武を謂う、美を尽せり、未だ善を尽さざるなりと。

韶は音楽の名前で、舜という帝王が作ったものです。

韶は、外形の美は尽くしているし道徳的にも非常に素晴らしい。

武は周国の武王が作った音楽です。

武は、周という国の最初のスタートが無理矢理力づくで奪い取ったような形で建国しているから、その音楽である武も、美を尽くしたとは言えないし、未だ道徳的にも完全なものになったとは言えない。

やはり物事は最初が肝心だということです。

民主党で申しますと、スタートしたばかりなのに、政治とカネという問題を表面化しています。母親から 1500 万円を貰い続け、父親から 4 億円貰ったと強弁せざるを得ない民主党のトップ二人は、早々と引退せねばならないのではないかと感じました。力ずくで無理矢理ポストの維持に汲々としていることは、必ず後に大きな厄介事をもたらすものだと感じます。

26　子曰く、上に居て寛ならず、礼を為して敬せず、喪に臨んで哀しまずんば、吾何

を以て之を観んや。

上のポストにいる人達が下の者に対して寛大ではない。儀式をする時に敬虔な氣持ちがない。葬儀で哀悼の情がこもっていない。人間として基本的に持たねばならない氣持ち・精神が欠けている人達を見ると、情けなくてどうにもならないと孔子は嘆いています。

今の日本を見ると、家庭にしても会社にしても、自治体・国家にしても、挨拶を最初にできない人が多い。朝起きて親に「おはようございます」も言えないし、「行って参ります」「ただ今帰りました」もない。会社の中で、目上を敬うような氣持ちがない。これは、終戦直後の悪い方の教育が花を開いている状態になっていると感じます。

「吾 何を以て之を観んや」と嘆いた孔子が、今の日本を教育という視点で見た時に、同じように思うのではないかと感じます。

ここは、敬虔な氣持ちをもって日々臨むがよかろうと読めばよいでしょう。

本日は以上です。有難うございました。